

一

次のI〜IVの各問いに答えなさい。

I 次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① シンギの程は定かではない。
- ② カンセイな住宅地に住む。
- ③ ジゼン事業を支援する。

II 次の傍線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ④ 激しい悪寒がする。
- ⑤ お金を勘定する。
- ⑥ 事態の発端。

III 熟語の読み方の構成の説明として正しいものを以下のア〜エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ⑦ 消印 ⑧ 本物
- ア 音読み+音読み イ 音読み+訓読み ウ 訓読み+音読み エ 訓読み+訓読み

IV 上の字と下の字との構成が同じである熟語を語群からそれぞれ選び、選んだものの読みを答えなさい。

- ⑨ 選択 ⑩ 上旬

【語群】

- 採掘 人為 入党 別姓

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

七月八日。七夕の翌日にあたる私の誕生日は日曜日だった。この年も織姫と彦星は逢いびきを果たせず、母は朝から窓辺に垂らしていた笹を片付けると、代わりに折り紙や紙テープで居間を彩った。すでにごちそうの下準備は整えられ、冷蔵庫には子供心をそそる食材がにぎやかなものもある。これがいつもの誕生日なら、私は幸福度一二〇パーセントで宙に浮いていたことだろう。

しかし、私は疲れきっていた。

好恵を誕生日会からしめだすことに決めたあの日から三週間、私は人の視線とはこんなにも怖いものかと思うくらい知らず知らず過ぎた。いつ、好恵に誕生日のことをさかれるのか。いつ、好恵は自分が誕生日に招かれないことを悟るのか。私は絶えず（ B ）好恵の視線ばかりを気にしていたのだ。

好恵に「おはよう」と声をかけられるだけで、私は招待状の催促でもされたように顔を赤くした。会話の途中で沈黙が訪れるたび、「とこで、紀ちゃんのお誕生日会だけ……」と切りだされるのではないかとどきまぎした。毎日が緊張の連続。七月八日が近づくほどにその緊張は高まっていった。

これほど自分が（ I ）とは知らなかった。復讐がこれほどの苦痛を伴うものとも知らなかった。ついに誕生日を迎えたその日、だから私は誕生日会やプレゼントの喜びより、ようやくその苦痛から解放される喜びのほうが大きかったのだ。

誕生日は滞りなく進んで、終わったと思う。もともと滞りなど起こりようもないパーティーだ。まずはケーキの蝋燭に火を灯し、部屋を暗くして「ハッピー・バースデー・ツー・ユー」の合唱。それから十の炎を吹き消し、パチパチと拍手。再び部屋に明かりが灯り、みんなからプレゼントをもらって、ようやくごちそう。皿の空いた座卓にはお菓子が並び、そのあまりは夕方、母がちり紙にくるんでプレゼントのお返しとともに配る。お決まりの儀式。この段取りさえ押さえればまず失敗はない。なのに好恵はそれすらもしてもらえなかった。好恵の十歳の誕生日にはケーキもなかったのだ。

みんなの帰った後、急がらんとした部屋の中で、私は一気に脱力した。もらったプレゼントをしまうのも億劫で、その場に散らかしたまま二階へ上がると、部屋のベッドにどてつとうつぶした。

Ⅱ ケーキの味はどうに忘れ、

Ⅲ 後味ばかりが残っていた。

一生に一度しかない十歳の誕生日。

もう永遠に取り戻せない特別な一日。

好恵はあの日、どんな思いで十代への第一歩を踏みだしたんだろう。

そして今日はどこで何を思い、過ごしていたんだろう。

誕生会の終了と同時に、私はこの胸の^④もやもやから解放されるはずだった。なのにもやもやは増す一方で、^⑤瞼の裏に焼きついた好恵の視線はなおも私を苦しめる。ついてない、と心底思った。私の誕生会が七月八日でなかったら、秋や冬の終わりのほうだったら、私は例年通りに何も考えず楽しい一日を過ごしていたはずだ。一年で一番幸せな一日。なのに、好恵の次に生まれたばかりにすべてがだいなしになってしまった。ついてない。ついてない。ついてない……。

「紀ちゃん」

と、そのとき、襖のむこうから姉の声がした。

入るよ、とノックもせずに見えた姉は、ベッドに伏せた私のもとへ（ C ）歩みより、黄色いリボンのかかったたんぽぽ文具店の包みを差し出した。

「今、家の前であんたの友達みたいな子に会ってさ。これ、あんたに渡してって」

「え」

「直接渡せばって言ったたら、自転車に乗っていつちゃった」

私は声もなくその包みを受けとった。姉が去ってからリボンをほどくと、包装紙にくるまれていたのは須田さん並に豪華なサンリオ商品のセットだった。私の好きなリトルツインスターズのメモ帳もある。

「……………」

^⑥気がつくど、足が勝手に私を運んでいた。私は階段を駆け下りて玄関をくぐりぬけ、庭先の自転車に飛び乗った。

自転車は私を好恵の家へ運んだ。

風も、地面も、すべてが私をそこへ運んでいく気がした。

好恵の家はあいかわらず整然と、一寸の乱れもなしに佇んでいた。軒先に縦列された二台の自転車の片方は、ついさつき好恵が停めたものにちがいがなく、私はその几帳面な停めかたに学校における彼女とのギャップを感じながら、自分の自転車を荒っぽく乗りすてた。それから一つ深呼吸をして玄関へむかった。

熟柿のような電球に照らされたブザーに手を伸ばすのには、勇気がいった。私は好恵と会うのが気まずいだけでなく、あの日、あんなにもはつきりと私たちを拒んだおばさんに会うことも恐れていたからだ。

どうか鬼母が出ませんように。

どきどきしながらブザーを押すと、数秒後に「はい」と低い声が出て、扉が開かれた。

「ひっ」

現れたのは鬼母だった。

「あ……………」

エプロン姿のおばさんは、濡れた手をそのポケットのあたりでぬぐいながら、私に困惑の目をむけた。^⑦夕食時のせいかな、扉のむこうからは炒めもののいい匂いが香ってくる。後ずさる私を前に、おばさんはその匂いをたどるようにふりかえり、好恵はどうのと

（ D ）言いながら奥の部屋へと踵を返した。私のことを憶えていたらしい。

数秒後、重たい足音と共に好恵が現れた。

「どうしたの」

開口一番に問われ、私はたじろいだ。好恵の声には「なんか用？」とでもいうような、白々とした響きがあったからだ。

「あの……………」

言葉につまった末、いきなり本題に入ると、

「え？ ああ、あれか」

自転車にはまだぬくもりが残っているはずなのに、好恵は遠い昔でもふりかえるようにわざわざ首を傾けた。リアクションの達人にしては鈍すぎる反応。私はますます勢いをそがれて動揺した。すまし顔をあさつての方向へむけている好恵を見ると、自分がここに何を期待して来たのかわからなくなってくる。

苦しい沈黙の末、ひとまずここは撤退だ、と逃げることにした。じゃ、それだけ、と早口で言いながら背をむけ、ドアノブに手をかける。

「夕ごはん……」

と、そのとき、背中からおばさんの声が出た。

「夕ごはん、まだなら食べていきなさい」

最初のうち、私はそれが自分にむけられた言葉とは思えなかった。あのおばさんがこんなことを言うわけがない。しかし、ふりむくとおばさんは怖いくらいにまっすぐに、確かに私を見つめていた。

(森絵都『永遠の出口』による)

問一 (A) () (D) にはいる言葉の組み合わせとして最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|---------|---|-------|---|-------|---|--------|
| ア | A | ばんばんに | B | びくびくと | C | ずかずかと | D | おつおつ |
| イ | A | ぼつぼつと | B | くらくらと | C | ふわふわと | D | ぎゃあぎゃあ |
| ウ | A | ぎゅうぎゅうに | B | おどおどと | C | ころころと | D | ぼそぼそ |
| エ | A | てんてんと | B | どきどきと | C | そろそろと | D | こそこそ |

問二 空欄 I に入る、「気が小さい人」という意味の言葉を漢字三字で答えなさい。

問三 傍線部①「復讐」の具体的な内容を本文中から探し、十字～十五字で抜き出しなさい。

問四 傍線部②とはどのような苦痛ですか。最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- ア 誕生会のこと好恵が好恵自身を責めるのではないかという不安を抱えていること。
- イ 誕生会の日好恵に押しかけられてしまうのではないかという不安を抱えていること。
- ウ 誕生会の計画が台無しになって自分が仲間はずれにされてしまうという不安を抱えていること。
- エ 誕生会のことを好恵に尋ねられたらどうしようかという不安を抱えていること。

問五 傍線部③のときの「私」の気持ちはどのようなものですか。最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- ア 誕生会の段取りを滞りなく済ませられ安心していている。
- イ みんなが帰ったあと取り残されたような寂しさを感じている。
- ウ ずっと気になっていた誕生会が終わり疲労を感じている。
- エ 呼んでいない好恵が来るはずもなく物足りなさを感じている。

問六 空欄 II III に入る味覚を表す言葉を、それぞれ二字で答えなさい。

問七 傍線部④の「胸のもやもや」とは何か。十五字以上二十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑤のときの「私」の気持ちを表した言葉で適当なものを、以下の中から全て選び記号で答えなさい。

- ア 驚き イ 怒り ウ ねたみ エ 焦り オ 楽しみ

問九 傍線部⑥「あの日」とはどのような日か、説明しなさい。

問十 傍線部⑦で、好恵の母が「私に困惑の目をむけた」のはなぜですか。最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- ア 「私」が家には二度と来ることはないような態度を、好恵の母がとったことがあったから。
イ 「私」が好恵を誕生日に呼ばなかったので腹を立て、すぐに帰ってほしいと思ったから。
ウ 「私」が家族の中の誰のことを訪ねてきたのか、全くわからずにとまどってしまったから。
エ 「私」がこんな夕食の時間に突然家へ訪ねて来たので、失礼な子どもだと思ったから。

問十一 傍線部⑧のような態度を好恵がとったのはなぜですか。最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- ア 自分を誕生日に呼んでくれなかった「私」に腹を立て、嫌がらせのつもりでプレゼントを渡したから。
イ 「私」の誕生日に自分だけ呼ばれなかったことを、あまり気にしていないように思わせたかったから。
ウ 「私」に会いたくなくてお姉さんにプレゼントを渡してもらったのに、「私」が来てしまいとまどっているから。
エ 「私」がわざわざ走ってお礼にきたことに対し怒りを感じ、その気持ちを「私」に分からせたかったから。

問十二 傍線部⑨の「期待」とはどのようなものか、十字以内で説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「森が荒れる」ということばを聞くようになって、もうどれくらいの時間が経つただろうか。森が荒れる、という語にはふたつくらいの意味がありそうだ。ひとつはスギやヒノキを植林した森の手入れが行き届かない状況をさしている。植林の後、手入れされることなく放置され、林床には下草が生い茂り、下のほうの枝はきたなく枯れ上がり、さらに幼樹が枯れてできた空間には「雑木」がはびこる。山が荒れるとはそのような状況をさす。要するに、「北山杉」の美林、「秋田杉」の美林といわれたような、林業家の魂のこもったような森が失われてきたというのだ。これはまさに雑草だらけの田に起きていることと軌を一にする。

もうひとつ、森が荒れているというのは、竹林が拡大し、森を侵食している状況をさしている。とくに里に近い森では、それまでさほどでなかった竹林の拡大が著しいという。たしかに関西地方の山々を見てみると、そのことが実感される。竹林の拡大は、ひとつには人びとが竹林にはいつてタケノコを採らなくなったからだといわれる。むしろちゃんとしたタケノコを採ろうとすれば竹林にも手を入れ管理してやる必要があるが、管理はおろか身近な竹林のタケノコさえ採らなくなったために竹林が拡大しているのである。

ふたつの現象には共通する原因がある。人が森に手を入れなくなったことである。かつては杉林も竹林も、どちらも人の手が加わった生産の場であった。よく手入れされた杉林や竹林はたしかに見た目にも美しく、日本の美として写真集などにも登場した。だがもともとスギやヒノキの森は季節の変化に乏しく、「春の新緑」や「秋の紅葉」のような変化を遂げることがない。また、そこに生息できる昆虫や動物種も限られ、生態学的な意味からも歓迎される樹種ではない。

タケの仲間についても同じである。まず根は浅く、山崩れなどにはまったく弱い。またタケはしばしば他の植物との共存を拒否し、純林を構成する。竹林の林床に草一本生えていない様を見たことのある人も多いだろうが、それはタケの葉などに含まれる特殊な物質のせいとも思われる。そのため竹林内の多様性は減少し、タケノコ以外の森の恵みに乏しくなる。

③ こうした特殊性の上に、最後の頼みであった経済的価値を失って、杉林や竹林はいまや森の問題児にされてしまった。だが、山を荒らしたのは人のほうなのだ。山が荒れるというのは、もともとが人の手の入った山に、人の手が入らなくなった結果起きた必然的帰結にすぎない。荒れる、というのは人の勝手な言い分であり、山にしてみれば遷移の法則にしたがってその土地にもっともふさわしい森に回

帰しようとしているにすぎない。その過程が人には汚く、また無価値に見えるというだけのことにはすぎないのである。

一方、今、原始の森^⑤にあつい視線が注がれる。

いく年から前の秋、私は念願かなって白神の森を訪れることができた。「ブナの原生林」として有名になったそこは、世界遺産になったこともあって、ここ何年か、訪れる観光客の数も大幅に増えたという。原生林などほとんど目にしたことのなかった私は、その日が来るのを心待ちにしていた。原始の森という語や雑誌などが書きたてるイメージに想像を膨らませ、原始の森と縄文の森のイメージを重ねていたのである。

だが、白神の森で生計を立ててきたマタギ^{*1}の工藤光治さんの話は、私の I を打ち砕いてしまった。工藤さんによれば、白神の土地はもろく、しばしば山崩れを起こすという。山崩れを起こした土地は裸地となって草が生い茂る。一種の攪乱地帯^{かくらん}である。山菜ともいわれるある種の草本はこういう攪乱地帯を好んで生える。マタギの人びともそうした土地に生える山菜を、採りながらも護^{まも}ってきた。たとえば採集にあたって株の一部を残すとか、切り口が腐らないように手当てをするという具合である。彼らはまた、山菜、キノコをはじめ、さまざまな物資を手に入れるために山に手を入れてきた。マタギの人たちは、白神の森をまったくのアンタッチャブルの森として見てきたのではない。大事な資源の再生を考えながら森を育ててきたのである。それは、原始の森ではない。そこはまさしく人の手が入った森——里山なのである。

だが、世界遺産に指定されたのは、「自然の森としての白神」である。自然遺産と銘打った以上、そこに人の手が加わることは許されない。だから白神も、その中心の部分では人の手を加えることが一切禁止されているという。だがそれではマタギの人びとの生活は護れない。マタギの人びとを含めて立ち入りや生業^{せいぎょう}を禁止することで白神のブナの森が護れるというなら、それはそれでひとつの選択かもしれない。だが、マタギを含めた人びとの手を遠ざけることで、ブナの森は護れるのだろうか。私はそこに疑問を抱いている。もつと直^{*2}截^{せつ}にいうなら、白神のブナの森を II と位置づけることの正当さを、私は疑ってみたいのである。

私たちは、ともすれば人間と自然とを機械的に対峙^{たいじ}させ、自然を護るということを、人を排除することだと考えがちである。自然の中には、人間を寄せつけない自然があるのも確かであろう。だが多くの「自然」には、大なり小なり人間の手が加わっている。あるいは

元来、人は自然の一構成者にすぎない。そして私たちが日常目にする「自然」は、大なり小なり人の手を受けて成立してきた「自然」なのである。そこから III を排除するなら、目の前の「自然」は早晩、その姿を変えてゆくことだろう。

(佐藤洋一郎「里と森の危機^{クライシス} 暮らし多様化への提言」による)

*1 マタギ……東北地方の山間部で活動する猟師のこと。

*2 直截に……ずばりと言いつける表現の様子。

問一 傍線部①「ふたつくりの意匠」で、最初に説明されている内容を示す箇所を抜き出し、二十字以上二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問二 傍線部②「竹林の拡大」がもたらした事態として、筆者が最も問題視していることを要旨に即して答えなさい。

問三 傍線部③「こうした特殊性」の内容として、正しくないものを以下の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア スギやヒノキの林は、かつては人間が生産の場としていたのに、今は雑木ばかりが生えているということ。
- イ スギやヒノキのような木は季節ごとの変貌が少なく、人間の関心がもたれにくいということ。
- ウ スギやヒノキの林においては生態系の広がりも限界があり、森とは共存しにくいということ。
- エ タケは他の植物が育ちにくい環境を作るという可能性が、生物学的にも認められるということ。

問四 傍線部④「山を荒らしたのは人のほうなのだ。」とはどういうことですか。文中の語句を用いて三十以上三十五字以内で説明しなさい。解答は「人間が」に続く形にすること。

問五 傍線部⑤「原始の森」と反対の意味で用いられている語を、傍線部⑤以降の文章から二字で抜き出しなさい。

問六 空欄Ⅰにあてはまる語を、問題文中より抜き出して答えなさい。

問七 傍線部⑥「まったくのアンタッチャブルの森」とはどういう森のことですか。最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- ア 観光客の立ち入りができない森
- イ 完全に人間の手で作られた森
- ウ 人の手を加えることが禁止された森
- エ マタギの人びとしか立ち入れない森

問八 空欄Ⅱにあてはまるものとして最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- ア 原始の森
- イ 自然の森
- ウ 竹林の森
- エ 山菜の森

問九 傍線部⑦「あるいは元来、人は自然の一構成者にすぎない。」とはどういうことですか。筆者の主張の説明として最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- ア 人間だけでなく微生物や植物、小動物によって自然が支えられていることを人間が忘れていているということ。
- イ 人は自然を利用しつつも、自らも自然の中に含まれているという意識を持たなければならないということ。
- ウ 文明の起こりにより自然を支配し続けた人間の限界が、現代社会でやっと思えるようになったということ。
- エ ブナの原生林も、時代を経て技術を受け継いできた人間の手が加わることで守られてきたということ。

問十 傍線部⑧「大なり小なり」がかかる部分として最も適当なものを、以下の中から選び記号で答えなさい。

- ア 人の手を
- イ 受けて
- ウ 成立してきた
- エ 「自然」なのである

問十一 空欄Ⅲにあてはまるものを、問題文中より三字以上五字以内で抜き出して答えなさい。

問十二 問題文は二つの段落に分けることができます。後半部の段落の最初の五字を答えなさい（句読点を含みます）。